

(同称十念)

皆さん方も学校で教わりになったと思いますが、インドでは西暦紀元前六世紀よりもずっと前から、非常に高度な宗教や哲学が、盛んに説かれていたのでございます。私の記憶にして誤りなければ、西洋の哲学は西暦紀元前六世紀位からであるが、お釈迦様がお出ましになりましたインドにおいては、西暦紀元前六世紀よりも以前にインダス河やガンジス河流域にバラモン教が成立し、その根本聖典ヴェーダが紀元前千二百年以降、前五百年の間に主要部分が成立しました。

それはバラモン階級を中心に信奉され、特にヴェーダ聖典に見られる宗教体系の内容は、多種多様で、呪術や自然神崇拜から高等な哲学的思惟までが含まれているが、全体として祭式万能的な傾向が強い。それである宗教学者が宗教を分類しました。一つは祭祀の道、いわゆるお祭りです。一つは信愛の道。もう一つは自覚の道。こういう分け方は不十分かもしれませんが、こういうふうにある宗教の学者・仏教の学者が分類しました。

高度な宗教・哲学を持っておりましたけれど、その中には非常に呪術的なものも多分に含まれておりました。私共はこの肉体に備わった処の感覚器官を以て、この世界を見てい

ます。そして私共が見ているこの世界を、現在では自然と言っています。仏教で言っている自然じぜんというのはいろいろな意味がありますが、今は現在使っているところの自然をいいます。そういう自然の事々物々を捉えて、そこに神の靈が宿っているとそれを崇拜する。日本でも三輪神社という、非常に古いお宮さんがあります。御神体は、と言うと裏にある三輪山である、と言うのです。このように自然物を捉えて、神の靈が宿る、として祈るといふようなのもインドの宗教の中に多々含まれておった訳です。

バラモンというのは、アーリア民族がインドに攻め込みまして原住民を征服して、その主となりました。その一番上の聖職者を言う。最近の言葉で申しますと、仏教の僧侶、カトリックの神父さんなどでございますが、インドの社会階級制度の四姓の最高位に位するバラモン教の司祭者と学者階級です。その下が王族及び士族の階級、その下が農工商などにたざさわる平民階級。そのもう一つ下に被征服者である奴隷の階級があったわけでございます。

お釈迦様は「四姓の者も仏教に帰すれば、みな釈尊の弟子として釈種の子となることは、あたかも四大河の水が皆一つの海に注ぐが如きである」と仰言いました。『増一阿含経』

に出ている名高いお言葉であります。そうではあるが、西暦紀元前（五六三頃〜四八三頃）にお釈迦様はご出世になりましたが、（現在に至りましてもそういう四姓に身分を分けるカースト制度は、未だインドに根強く残っている訳です）丁度そういう時代は、この頃の流行語を使うと、バラモン教によるヴェーダ文化のパラダイムがまさに崩壊しかかった処、とこう言えばよろしいでしょうか。そういう時代でありました。

ところがそういう時代になると、王族・武士階級の身分の人も、農工商の身分の人も、奴隷階級の人も、道を求めて一生懸命に修行する人がありました。そういう人を沙門と申します。お釈迦様は王族階級ですが、そこから出家なさったから沙門の中に入る訳でございます。古い聖典を読むと、「沙門・バラモンは」とお釈迦様がよく仰言っていらいっしやいます。こういう時代を選んでお釈迦様がお現われになって、修行して悟りをお開きになった訳です。そうだからお釈迦様が御説法なさると、バラモンは何だか自分の特権を偉そうに脅かす、というふうに思った訳でしょうか。

光明会では寺院や在家でお別時を催します。ところがある時お寺でお別時を勤めた処、沢山参加者がありまして、皆さんも御存じでしょうか。お寺には内陣と外陣がございます。

内陣は一段高く、参詣者の席である外陣は一段下であります。どちらも同じ高さの所は、木か竹で以て囲いをしています。ところが光明会の方々はそういうことご存じないから、人数が沢山になったからと、囲いを取ってしまったって内陣の中にも入ろうということになったのです。するとそこのご住職のご母堂さんが私の処に来て、「在家であるのに内陣の中に入ってお念仏をしている。在家は外陣でと言ってくるからどうぞ御了解願いたい」と言つて来られました。それで私、「ああそういうことを皆さん御存じないので、済みません」とお詫びしました。先代さんの奥さんは旧習通り申されましたので、原状に復されました。

現在でもそういうようなことでありますから、何せ二千五百年昔でありますから、お釈迦様が御説法なさるとその御説法を皆聞きに来る。中にはこれまで聖職者として臨んできたバラモンの、同族の若者もやつて来る。そして、「お釈迦様の御説法はまあ実に結構だ、私もお釈迦様のお弟子になつて出家しよう」と、いうようなことがよくあったのでございましょうね。そうするとカースト制度の厳しいインドの事ですから、バラモンは、同族の若者がお釈迦様のところに行つてしまつたものですから、腹を立ててお釈迦様のところに怒鳴り込んで来ました。しかしお釈迦様は寂靜じやくじやうとして麗しきを換えず聞いていられます

た。

又時にはそのような事があつた時、自分の宗教と哲学を滔々として説いて論戦を挑みました。インドでは古来哲学と宗教は相伴つて発達し、唯物論的立場のものを除いては、哲学はすべて宗教的であつて、宗教はすべて哲学的に理論づけされておりました。

このような時、お釈迦様は何も言わないでそれを聞いていらつしやいました。お釈迦様は王族階級から出家されたのでその王族階級であつた時の俗姓がある。それをゴータマと言います。

そこでお釈迦様のことを、出家なさらない以前の俗姓を使って「ゴータマ」とよくバラモンは申しました。「ゴータマよ、参つたか」とこう言つた訳です。するとお釈迦様は「勝たば恨みを受けつべし 負けなば心安からじ 勝ちと負けとを捨つる身の 夜半の眠りぞ円かなる 無瞋の仏を恥ずかしめ（これは仏道を修する上で最大の障害となる瞋恚のことですね。『智度論』には「瞋恚の咎は最も深く、貪瞋痴の三毒の中で最も重い」と説かれている程です。その瞋恚が対治されてしまつている） 無垢の聖を罵るも 風に逆らう塵の如 返りて己が身を汚す」という偈文を麗しきをお換えにならないでお詠じになりま

した。

そこでそのバラモンは心打たれて、自分もお釈迦様の指導を頂き修行をして、終に永遠の生命・阿羅漢果を得た、というお話しがあります。「勝たば恨みを受けつべし 負けなば心安からじ 勝ちと負けとを捨つる身の 夜半の眠りぞ円かなる 無瞋の仏を恥ずかしめ 無垢の聖を罵るも 風に逆らう塵の如 返りて己が身を汚す」とお釈迦様は仰言いましたが、昔はこういうふうにならぬ文語体だったので。韻文体の偈文だったので。それは宙で覚え易いですね。この頃は皆口語体です。口語体であると宙で覚えるのは難しいし、又軽すぎます。そういうことがございました。

ある時お釈迦様がマガタ国南部の耕田バラモンの所にやっていらつしやいました。そこではちようど春の播種期でございました。その時バラモンは沢山の使用人を使って、田圃を耕す、牛等を使って耕している、又種を播く等まあ忙しい時でございました。バラモンは自分の田圃を耕してもらうために、使用人に御飯を支給している最中でした。そこに従容として釈尊がおいでになりました、お立ちでございました。

「あらゴータマさん、よくいらつしやいました。けれどあなたさまが御覧になつて

ように、ただ今は農繁期であつて非常に忙しいんです。もつと暇な時に、農閑期におい
になれば托鉢の御供養も致しますけれども、今はそんなことをしている暇はありません」
と、こう言いました。

ところがそれだけでなくて又こう言いました。「あなた様もそんな托鉢ばかりしていな
いで、田圃耕して種播いて、自ら生活なさつたらどうですか」と。するとお釈迦様は「私
も田を耕し、種を播いている者である。そのようにして自活している者だ」と言われまし
た。そこでそのバラモンがびつくりしまして「あらゴータマよ。あなた様が土地を耕した
り、牛を御して鋤を引かせ、種を播いたり、収穫したりそういうこととしてゐる姿を見たこ
とありません。あなたの田圃はどこにありますか、あなたの鋤はどこにあるのですか、あ
なたの播く種って何ですか」と、こう言いました。

そうするとお釈迦様は「我が智慧は田を耕すの鋤なり。信はわが播く種子である。悪業
を除くは、わが田の除草である。精進は重荷を負いて行く牛であり、われらを三昧相應の
安穩の境地に運ぶ。これがわが耕作であり、不死はその果実である。われらは、この如き
耕作をなして、すべての苦悩より脱れたり」とお釈迦様は仰言いました。そうするとその

バラモンはそのお釈迦様の仰言ることをよく理解しました。

そして乳糜^{ラクミ}を盛つて、お釈迦様に献げました。するとお釈迦様はこうおっしゃいました。

「偈文を唱えたるが故に、その対価として布施を受くるに非ず」。これは仏教で非常に大切なことです。偈文をお唱えになったですね。お経を唱えたから、その対価として、このお蜜柑は一個幾らですという取り引きと同じようにお金を受け取る、そういうものではないのだ。「偈文唱えるが故に、その対価として布施を受くるに非ず。斯くの如く一心に心の耕作をするということによって、靈的人格が完成する。その尊き人格靈化の道を行じ、それを実現した尊敬すべき聖なる者を見れば、かかる人に供養せよ。それは功德を求むる者の福田なり」と。こうお釈迦様はおっしゃいました。福田とは福德を生み出す田のことです。福德、功德を得るから田に喩えて申します。

日本では三代將軍徳川家光の時に、島原の乱がありました。それ以後日本に檀家制度・檀徒制度が出来ました。檀家制度というのは、檀徒がおる、その檀徒はお寺というものの維持をする。葬式・法事はそのお寺さんがする。そしてお経を読むとその対価としてお布施を出す。当たり前みたいに見える。しかし供養の真精神はこうなのだ、かように

お釈迦様は仰言つた訳です。

仏教では従来四通りの出家を言います。第一は身出家心不出家。これは身は剃髪染衣しているが、心は世俗的な執着束縛を離れておらぬもの。第二は身在家心出家。生業を立て家庭生活を営みながら、心は世俗的な執着束縛を離れているもの。第三は身心俱ども出家。身心共に世俗的な執着束縛を離れているもの。第四は身心俱不出家。これは身心共に世俗的な執着束縛を離れておらぬもの。このように仏教では「四類出家」ということを申して参りました。

キリシタンが日本にやって来ました。織田信長は新しいものが好きだから、それを認めた訳です。珍しい物を持って献上すると非常に喜びました。その次は豊臣秀吉でしたが、九州征伐をしました。すると九州にキリシタン大名の大友宗麟がおりました。その大友宗麟の領地には、神社仏閣は全くありませんでした。皆潰してしまつたのです。それで豊臣秀吉は烈火の如く怒りまして、キリシタンをそのままにしておくかと日本が危うい、と言ひ出しました。

それから次は徳川家康です。徳川家康は若き日、一向一揆のために非常に苦しみました。

ところが三代目家光の時にキリシタンの大騒動が起りました。島原の藩主が苛斂誅求かれんしゅうまうしたこともその原因の一つでした。ものすごい年貢米を取ったのです。それで百姓等は皆がそれ程キリシタンを信じていた訳でないけれど、その中にたくさん入っていったのです。幕府が直接軍隊を送って鎮圧しました。それで島原のお殿様は、家光の乳母である春日局の所に行きまして、どうぞ將軍様におとりなししてほしいと頼んだけれど、春日局はその島原の藩主の政治の仕方が悪いのを知っているので断りました。それでお家断絶になりました。

そんなことで檀那寺、檀家制度というのは家光の時代に出来ました。それがずっと続いて、現在は家族制度撤廃というが、そうでありながらその風習は根強く残っています。キリスト教のカトリックは五億六億七億のカトリック教徒を減らさないように、血まなこになって努力しています。これは余談ですけれど、そういうことでございました。

だから沙門が説法をして、聖職者であり司祭であるバラモンの域を侵す、ということを非常に嫌がった訳ですけれど、お釈迦様は王族武士の出家した人ですから沙門の中に入りになると申しましたが、沙門とは仏教と仏教以外の外道に通じて用います。出家の修行

者のことです。

それでお釈迦様の御教えがどんどん盛んになって参りました。そこでバラモンの人達が集まりました。こうしているとゴータマの宗教が自分達を脅かすに至る、なんかいい方法はないであろうか、とその長老さん達が集まって相談会が開かれました。お釈迦様には、人に隠れてどこどこでこんな悪いことをしているという、ニュースはないだろうか。しかし完徳の鑑かがみであるお釈迦様ですからそういうようなニュースは、皆が集まりましても一つもありません。「困ったねえ、困ったねえ」と言っていました。

そうするとそこへ女の子がやって来ました。インドは暑い所ですから、十三・四才ぐらいでありましても、ものすごい成熟しているんです。それでその子が「私にいい考えがあります」と言いました。「何だ。娘のくせに引っ込んでおれ」と言ったら、「あなた方長老さん達が一心に考えても、ゴータマの宗教をやつつける方法が無いのであれば、年若い乙女であっても私に任したらどうですか」と、それで結局「すべが無いんだから任そうか」ということになりました。

インドは暑うございませるので、お釈迦様は夜、森の中で御説法なさる。だから經典には、

お月様の光りを受けて世尊は御説法をなさる、月の光りは釈尊を照らす、お釈迦様の尊いお顔・お姿というものに月の光りが反射する。その麗しい光景が聖典に載っています。そのように御説法をしていられました。その時その十三・四の娘さんが、ざるのようなものをお腹の上へのせ、紐で括りまして上に衣類を着けて出て来ました。お話していらつしやるお釈迦様のところにやつて来まして、あるうことか「我が夫よ、我が夫よ」とこういふふうに呼びかけました。

お話を聞いている人々は皆びっくり仰天しました。するとその娘さんは「あなたは私を一体どうしてくれるのですか。私は臨月であつて、間もなく生まれて来る子のために、色々な準備をしなければなりません。けれどそのお金もない。一体どうして下さるんですか」と言いました。お話を聞いている皆の人々はびっくりしました。そしてお釈迦様は一体どういう反応を示しなさるであろうか、と思つておりましたけれど、お釈迦様は麗しきをお換えになりませんでした。ちつとも弁解なさいませんでした。弁解されないと、私共は凡夫だから「あら、怪しいぞ」と勘ぐりますね。そこに天の神の帝釈天が一匹の鼠となつてその娘さんの足元から這い上がりまして、ざるを縛っているその紐を噛み切りました。ざ

るは下に落ちました。これでバラモンの悪巧みであつたということが分かりました。そこで皆さん達は声を揃えてバラモンの悪巧みを攻撃しました。けれどその時もお釈迦様は何も仰言らず、麗しきをお換えになりませんでした。このようにして娘さんの悪巧みは失敗しました。

それでまたバラモンは集まりました。何かお釈迦様にけちを付けるといふ方法は無いであらうか、と皆思つた訳です。けれど全くありません。仏というお方は貪・瞋・痴の煩惱を全部靈化なさつた方です。瞋といふことはムツとすることです。皆さんも御存じかも知れませんが、朝鮮ではお葬式があると泣く人を雇います。オンオンオンと悲しそうに泣くのです。その人を雇うんです。そこでこの世の中には理由なくて泣くといふ名人がおる、それを一つ雇うてきたらどうか。あるいは又悪口雑言言う上手な人がおる、物凄く悪口が上手だ、それをお金出して雇うてきたらどうか。お葬式じゃないから泣く人は駄目だ、悪口の名人を雇うてきたらどうか。それがいいそれがいい、あること無いことお釈迦様の前で、次から次へ言うたならば、いくらお釈迦様でも腹立つ煩惱はちよつとは残っているだろう。少しでも腹立つと顔に出る。するともう仏でない。これに限るといふことになりま

して、悪口言いの名人達をお金出して雇うてきました。それらの人がお釈迦様のところにやつて来まして、順繰りに、まあ上手に、次から次へ次から次へと悪口を言いました。ところがお釈迦様は腹をお立てになりません。腹立てられるとそれだけ効果があったということで、悪口を言うことに励みがつくのだけれど、一向に腹立てなさらぬ。暖簾に腕押しみたいな状態である。それで、全部ハアハアと言つて疲れ果てました。

そこでお釈迦様が「もう悪口仰言ふことありませんか」と言われると、「ハア疲れました」と悪口言いの名人達が皆言うじやございせんか。そうするとお釈迦様は「あなた達が御馳走を作つて、それを隣り近所に持つて行つたとする。ところが隣り近所の人がそれを受け取つてくれなかつたという時はどうなさいますか」と言われますと、「それは、誰も御馳走を受け取つてくれなければ、自分の家に持つて帰るといふ他はありません」と言いました。そこでお釈迦様は、「あなた達は沢山な悪口雑言の御馳走を、次から次へと私に向かつて提供された。けれど私はそれを受け取らず腹立てなかつた。どうぞその悪口雑言の御馳走を自分の家に持つて帰つて下さい」と、仰言つた訳です。

だからお釈迦様の偈文のように、ちやうど「風に逆らう塵の如　返りて己が身を汚す」

という訳でございます。このようにお釈迦様は貪欲・瞋恚・愚痴という、根本無明、それに備わっているところの煩惱をことごとく対治した完徳の鑑のお方である、と言うことが出来るのでございますね。

お釈迦様の常随給仕のお弟子は、阿難です。阿難は釈迦族の王族です。その阿難のお兄さんは提婆達多と一応言われている。その提婆達多はお釈迦様に背きました。そしてアジャセ太子に反乱を起こさせ、「ご自分がアジャセ王になりなさい、そして自分がお釈迦様を倒して、宗教と政治が提携すれば天下刃向かう者なし」。こういうふうに思いまして、そして奇跡を現するその方法は三昧である。天眼によつて出来る。それを悟りを開いているお弟子に教えてくれ、教えてくれと言いました。ところが悟り開いている人は、提婆達多の悪巧みを見抜いているので教えませんでした。それで弟の阿難のところに行きました。弟は非常に好人物であり又お兄さんでありますから、「こうすれば三昧に入つて奇跡を現すこと出来る」と、それを教えました。

そこでその修行をしました。そして三昧を得ました。三昧心を以て奇跡を現じまして、アジャセ太子を仰天させて自分の信奉者とし、その力をかりてお釈迦様を殺そうとしまし

た。これは戒浄上人の『礼拝議講話』にも載っていることでございますが、二人してお釈迦様を殺そうとしたけれど、失敗しました。

アジャセ太子が「お釈迦様よ、あなた様のお話を聞きたいから、どうぞ私の城においで下さい」と言いました。お釈迦様はそのことをちゃんと知ろしめして、いよいよアジャセを救う時が来たとして、「承知した」と仰言いました。そうしたら、穴を掘ってその下に火を入れて、上に土を載せておきました。するとお釈迦様は五百人のお弟子を連れておいでになりました。ぱっとお釈迦様が足を掛けなさらしたら、だあーと下の落とし穴に落ち込みなさいました。後ろから付いておった五百人のお弟子達は天を仰いで虚空に舞い上がった、とこう申します。

阿難は、というと一緒に落ちました。そこでアジャセが、お釈迦様が火に焼かれて死ぬ様を、どんな醜態示しているかと思つて見ました。するとお釈迦様の下にお蓮台があつて、火の上に浮いていられました。傍らに阿難がいる。そしてアジャセを見てにこつとお笑いになりました。それでアジャセはその時分かりました。私の師匠の提婆達多はお上手言うど喜ぶ。何か気に入らんことがあると怒る。お釈迦様は殺される目に遭いながら、にこつ

とお笑いになった。人格が違う、ということを知って、終にお釈迦様に御帰依するということになりました。

提婆達多は随分悪いことをした訳ですね。どうしてもお釈迦様を殺すこと出来ませんでした。象の中でも一番癡猛なのは黒象である。その黒い象にお酒飲ましてお釈迦様を襲撃させた。ところがお釈迦様の前に行ったらその黒象達は足をまげて、頭下げた。どうしても殺すこと出来ませんでした。そういたしますと、現在から五通りの罪を作った者、五逆罪を作った者は生きながら無間地獄に堕ちる、と經典に書いてあります。ぱっと大地開けて提婆達多は無間地獄に堕ちました。こういうことであります。そこでお釈迦様は神通第一のお弟子の目連尊者に、「無間地獄に堕ちている提婆達多を見舞うてやれ」とおっしゃいました。そこでお見舞いしました。「さぞ辛いだろうねえ」とこう言いました。すると「これから後は弁栄聖者仰言った通り―その提婆達多は、こう言いました。「有頂天の夕涼みだ」と。

有頂天というのはこういう姿・形・色・形あるこの世界、その形ある世界の一番上の第四禪天（色究竟天）を有頂天と言う。処がその四禪天の上に無色界がある。無色界に四通

りある。その一番上を非想非々想処と言う。アララ、ウドラの仙人はそこ迄到達したとい
います。それはこの有情の住んでいる世界の一番のてっぺんです。その意味に於いて、又
有頂天とこれを言う。有頂天に二種ある。形ある処の有頂天は第四禪天である。もう一つ
は無色界の頂天を有頂天と言う。それは非想非々想処である。非想非々想処は有情の生存
の最高位です。けれども厳密にこれを観察すれば、極めて微妙なる処の動揺あり。まだア
ーラヤ識の世界です。真の悟りの世界でなく、これが非想非々想処です。とにかくそうい
う世界をいう。「有頂天の夕涼み」と、提婆は言ったといひます。

皆さんは、お釈迦様みたいなお方にそんな悪いことをする提婆達多というのがあったの
ですか、と不思議に思いなさるでしょうね。ところがお釈迦様の前世にお仕えしていたと
ころのお師匠様を阿私あし仙人と言いました。薪を取って来ては御飯炊きする、弟子である
ところのお釈迦様はそのお師匠様である阿私仙人に、色々な面倒をみて仕えておられた、と
いうのです。そこで阿私仙人もお年を取っている。だから適当な休み場所が無いという時
は、腰下ろす石も無い。年取ったら、石の上に腰下ろすと腰が冷えるので、お釈迦様は自
分の体を腰かけ代わりにしてお師匠様を休憩させなされた、というのが前世であります。

そこでお釈迦様は生まれ変わってこの世に於いて成等正覺なされた。そのお師匠様の阿私仙人は如何。阿私仙人はこの世に於いて釈迦族に於ける王族の提婆達多となりました。そしてもうこれ以上の悪いこと無いという程にお釈迦様に対しました。それでもお釈迦様は麗しきを換えられなかった。斯くの如く、仏たるお方はこうなのだと思ふのが為の、提婆達多は前世のお釈迦様のお師匠様の生まれ代わりだ、ということが法華經の中に書かれています。こう弁榮聖者おっしゃった訳であります。

そうですから、キリストにユダ、釈迦に提婆と言う。それからこれ、確かバイブルにあつたかと思うのですが、皆さんバイブルに詳しいお方はその箇所を教えて頂くと結構ですが、「木はその実によりて、知られる」と。いい言葉ですね。お釈迦様の御指導頂いたお弟子に、どのような立派なお弟子が出来たか。釈尊とその弟子方、それを見ればその仏法の尊さが分かる、と言うのでございます。

だから私共も是非共そういうふうにお育て頂きたい、一心にお念仏いたしまして、オヤ様のお光明を蒙って聖意に叶う者とさせて頂きたいと思ひます。自分も耕すということ、自分も耕作しているということ、その耕作というもののその結果は不死の涅槃です。オヤ

様を離れると心の畑には必ず雑草が生える。その雑草を除去する。雑草は身・口・意三業に起る所の悪業です。それを除き去るにはオヤ様のお光明を頂いて、除き去るの外はない、ということでございます。それではこれで終わらせて頂きます。有り難うございます。た。

(同称十念)